【国語】
実践事例：小学校２年生　／実施機関：日野市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント
・平仮名、カタカナ（表音文字）の自動化（瞬時に読み書きすること）が定着していないため、スラスラ読むことができない。
・記憶をたよりに読むので、読み飛ばしや勝手読みがある。
・所定時間内に板書を書き写したり、意見や感想を書いたりすることができない。
・自分の書いた文でも、スラスラ読むことができないため、書き誤りに気付くことができない。
・漢字の細部の違いに気付かないため、正確に書けない。
・字義通りの解釈をするため、物語では情景描写や行動から、登場人物の心情を読み取れない。

【指導例】
１．対象とした児童生徒の実態
（１）対象の障害
■自閉症　□情緒障害　■ＬＤ（学習障害）　□ＡＤＨＤ（注意欠陥/多動性障害）
□その他

（２）子供の困難さ
■見ること　□聞くこと　□話すこと　■読むこと　■書くこと　□動くこと
■コミュニケーションをすること　□気持ちを表現すること
□落ち着くこと・集中すること　□概念（時間、大きさ等）を理解すること
□学習（計算、推論等）すること　■その他

・平仮名、カタカナ（表音文字）が自動化されていないため、五十音を正確に短時間で書くことができない。
・分かち書きで書かれた文であっても、スラスラ読めない。
・聞いて理解することはできるので、事前に読み聞かせをすることで内容は理解できるが、記憶をたよりに読むので、細部の読み誤りがある。
・繰り返し音読練習をしても正確には読めない。
・漢字の細部を見ることが苦手で、「大と犬」、「日と月」等の違いが分からず、読み誤り、書き誤りがある。
・診断はされていないが、自閉的な傾向があり、物語では字義通りの解釈をするため、登場人物の心情を理解できないことがある。
・学校生活の中で、同じ出来事を他児と違う受け止めをするため、トラブルになることがある。
・自己の読み書きの苦手さを理解しており、自信を喪失している。

２．教科における学習上のつまずきを把握するための方策

（１）実態把握の時期

・１年生の担任からの報告により、読み書きにつまずきがあると予想され、２年生１学期に、学級担任、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター等で丁寧な観察を行った。

（２）実態把握の方法（実施者・方法）

・２年生６月に校内の通級による指導（言語障害）において、絵画語彙発達検査、グッドイナフ人物画知能検査、平仮名単語聴写テスト等を実施。
・２年生６月より、通級による指導（言語障害）での週２回（１回１時間）の指導開始。
・２年生 11 月に市のスクールカウンセラーにより、ＷＩＳＣ－Ⅳ知能検査を実施。

３．指導内容

（１）教科における学習上のつまずきの内容

・文章をスラスラ読めない。
・板書を写すのに時間がかかり、また、正確に書き写せない。
・自分の書いた文でも正確に読むことができず、書き誤りに気付けない。
・漢字を正確に書くことができない。
・物語の登場人物の心情の解釈がずれることがある。

（２）つまずいている背景・原因

・平仮名、カタカナ（表音文字）の自動化（瞬時に読み書きできること）の未定着。
・形の細部の違いが分からない。
・言葉に書かれていないことが想像できない。

（３）（１）に対し実施した指導方法、工夫した点

（ｉ）授業における全体指導、個への指導について

・読み書きが苦手であることを考慮に入れた授業作り。（指導内容の焦点化、視覚化、共有化）
　→全員音読の多用。視写しやすい板書等
・読み書きの負担を軽減する本児童用のワークシートの作成。
・黒板が見やすく、教師の声掛けがしやすい座席。
・言語障害通級指導学級での補充指導を生かし、本児童が授業内で活躍できる場の設定。

（ⅱ）個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

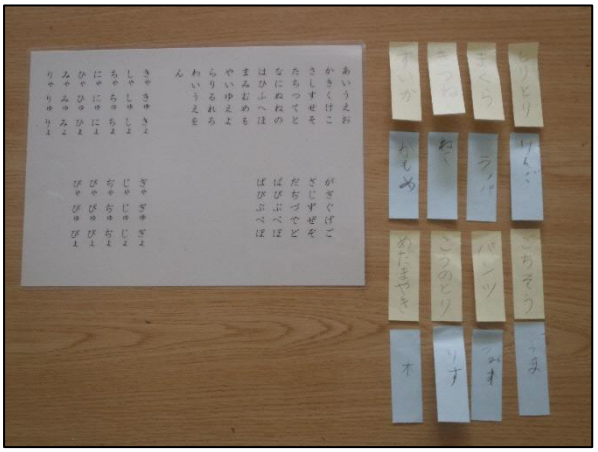
通級による指導（言語障害）で行った指導

・平仮名の自動化を促進するための指導。
　→毎回、五十音を速記させ、タイムを計る。
・無理なく読んだり書いたりができる課題の設定。
　→付箋を使ったしりとりや言葉集め。
・しりとりや言葉集めで出てきた言葉を使った短文作り。
・在籍学級での国語授業への参加意欲を促進させるための補充指導。

・事前の読み聞かせによる内容の大体の把握。
・説明文は段落毎に短冊にした教材文、物語は場面毎に分けた教材文での学習。
・書く負担を減らした内容理解を図るためのワークシート。
・既習漢字の読み書きの復習。

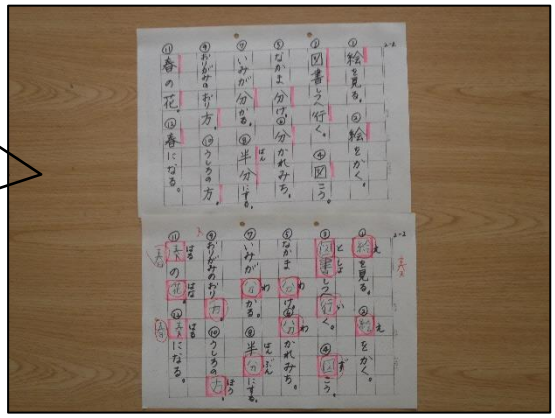
（４）（３）の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

・通級による指導（言語障害）での指導開始当初には、８分以上かかっていた五十音の速記が、年度末には、２分代へと時間短縮した。
・自己の苦手さへの理解が進み、漢字の細部を注意して見るようになった。
・事前に読み書きせをしてもらうと、内容が理解でき、音読の負担も軽くなることが分かり、進んで予習をするようになった。
・校内通級の利点を生かし、在籍学級担任と通級による指導担当が頻繁に情報交換をすることができ、相互の児童理解が深まった。
・在籍学級担任と通級による指導の担当が連携、協力することにより、学級内での読み書きの負担が軽減され、本児童が授業で活躍する場面も増え、学習意欲の低下を防ぐことができた。
・本児童への学級内での支援方法を検討することが、結果的に授業の質の向上につながった。
・保護者と話合いの機会をもつことにより、家庭での学習支援方法が本児童に合ったものへと変化した。
・今後の課題としては、表音文字の自動化が定着しない場合も考慮に入れた、支援方法を見つけることが急務である。



五十音表を横において、二色の付箋紙を使ったしりとり。

字が思い出せない時は、すぐに見て確認。



読みのテストをしてから同じ問題で書くテスト。

思い出せない時には、「見て書いてよい」というルールで実施。

自己採点で間違いに気付く。

【数学】
　実践事例：中学校２年生　／実施機関：日野市教育委員会

取組の内容・成果等
　模範授業を複数回全員で観察しつまずきの共有と指導方法について検証した。
【特別授業における生徒のつまずきポイントと対応策】
① 黒板に書かれていることと、手元のプリントに書いてあることを結びつけるのに時間がかかる。
⇒説明を聞く時間と、聞いたことを手元のプリントにまとめる時間を分けることが大切である。聞きながらや、書きながらといった二つ以上の動作を並行して行うことが困難な生徒に対しては、明確に時間を分けて指導することが必要となる。

② 連立方程式のような複数の式において、扱う文字の順番が変わっていることに気づかず混乱してしまう。
⇒例えば、x と y の順番が変わって出てくる場合は、x と y を色分けして指導する必要がある。また、順番が変わっていることを矢印などの記号を使って、確実に把握させる必要がある。指導する側としては、生徒が混乱しているという状況に気づきにくい場合があるため、少しずつ確認しながら授業を進めていくことが大切だ。

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント
・既習内容が未定着である
・集中を持続することが難しい
・書くことに対する集中が困難である
・書き写すことに時間がかかる
・問題を正確に写すことができない
・教員の説明が理解する事に時間がかかる
・数の増減が読み取れない
・空間を認知することが苦手
・短期記憶が定着しない
・手順が分からない
・ノートを見ても分からない
・自分の言葉でまとめることが不得意
・話し合いに参加することが苦手

【指導例】
１．対象とした児童生徒の実態
（１）対象の障害
■自閉症　□情緒障害　□ＬＤ（学習障害）　□ＡＤＨＤ（注意欠陥/多動性障害）
□その他
（２）子供の困難さ

□見ること　□聞くこと　□話すこと　□読むこと　□書くこと　□動くこと
■コミュニケーションをすること　□気持ちを表現すること
□落ち着くこと・集中すること　□概念（時間、大きさ等）を理解すること
□学習（計算、推論等）すること　□その他

グラフなど黒板に提示した際、物事を限定的に捉える傾向があるためグラフ全体を見て式の傾きなどを理解ることが苦手である。また、こだわりの強さから一度思い込むとなかなか修正することが難しい面がみられる。学習の見通しを立てて落ち着いて学習することが苦手であるため、課題（問題や次の指示）の切り替わりの際に落ち着きがなくなってしまったり、場面によっては教室からエスケープしてしまったりすることがある。

２．教科における学習上のつまずきを把握するための方策

（１）実態把握の時期
年度当初から一カ月間ほど当該生徒を観察し、課題行動を記録し学習におけるつまずきを分析することによって本人が有する課題を把握する。
（２）実態把握の方法（実施者・方法）
担当学年教員が、小学校教員からのアセスメントにより得られた情報から実態把握異を行う。教科担当教員が、保護者や本人との面接でつまずいている単元や領域を聞き取る。また、小テストやノートなどの成果物を点検し学習状況の把握に努める。その他、行動についても担当学年教員が、行動観察日記に記録し行動における特徴の把握を行う。

３．指導内容
（１）教科における学習上のつまずきの内容

座標から一次関数を求める問題とグラフを作成する作業をするところでつまずきが見られた。座標のｘとｙの順番と、ｘとｙ順番が逆になって理解していた。これは、式中の（３，１）と板書した例題に対して、１＝x、３＝y と間違えるといったために起こったことによって正しい傾きを得ることができなかった。
一つ一つの計算は理解していても、まとまった全体像をイメージしただけなので、文章問題等でつまずく傾向がある。学んだことを実生活でロールプレイする際に、状況に応じて使い分けるのが不得意である。
（２）つまずいている背景・原因
学習する単元（問題や教材の提示）において、先に起こりうるであろうつまずきの原因を本人が自覚していないため、同じ学習過程や同様の内容でつまずくことがみられる。また、興味や関心が限定的なため実生活で活用することが苦手であり、パターンで覚えていることがあるため、もっている知識や技能を一般化（生活の中で活用する）する経験も少ないため学習したことが習得できないことがつまずく原因となっている。また、指導者側も学習障害をもっている生徒に対する指導内容や指導方法の理解が不十分である点もあげられる。

（３）（１）に対し実施した指導方法、工夫した点

（ｉ）授業における全体指導、個への指導について
学習内容を見通し、全体像をつかみやすくするために学習する内容や要点を繰り返し示し、生徒自身が学習過程や学習内容を言動で反復させることによって本人の学習に対する困難さを解消することにつなげていく。授業に対する集中力を少しでも維持するために、座席配置を工夫する。また、掲示物が目に入らないように教室前方の掲示板にカーテンを張るなど教室環境を整える。また掲示物を貼る際は、前方に貼らないようにし、教材提示は特にコントラストをはっきりさせて認知しやすくしている。見通しを立てやすくするために学習の流れを視覚的に示すなどする。当初のルール（分からないときは挙手をする・問題を解いている途中であれば発声するなどのルールを決めておくと安心して学習に集中できることがある。）を明示することで、つまずくであろう単元や問題演習でスムーズな学習へと導く。

（ⅱ）個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）
本人が学習に対する困難さが強い教科において取り出し指導を実施した。また、通級による指導においては個のもっている特性が学習面でマイナスに働いている点に着目し、改善を図る取組を横断的に実践するために教科指導に当たる教員と連携をとり行った。

（４）（３）の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）
困っている学習課題をいきなり指導するのではなく、その生徒が得意な計算を最初に出題し、メインの問題までたどり着くまでの助走学習を行う。
失敗をなるべくさせない学習方法として、問題を解くためのヒント（内容、視覚的、言語的指示）を最大から徐々にヒントを減らしていくことで解けたという達成感を味合わせる指導を行った。小テスト、ノートの完成の度合いまた、行動面の課題の実態把握のデータを定期的に分析し不適応の頻度が減少していれば効果があったと確かめることができる。
ヒントが最も少なくなっていれば、知識や問題を解く技能が定着したといえる。いろいろな指示の出し方や教材や学習場面を変更した際、適切な答えを導けたり答え方に変化させることも確認できれば様々な場面で活用できると評価できる。
面接や日々の意欲的に変化した学習態度などを通して望ましい学習態度が身に付いたと評価することができる。